会報

第九号
36. 2. 1

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話七五〇番

山崎町に還った閑斎像

和田疎人

私はこの一文を草するに当り、今更人の世の縁というものの不思議さを感ぜずにはいられない。

我山崎町の閑斎神社に閑斎の坐像が寄進された詳しい経緯を知るだけに、尚更その感が深い。その縁の糸によってその像も還るべき所に還って来たという様な気がする。

この寄進の話が実現したのは、元朝日新聞の主幹で現在評論家の嘉治隆一氏が我々文化団体、新潮会の請を入れて九州講演の帰途、わざ〳〵当地に足を伸ばして下さったのがきっかけとなっている。

去る十月十八日、夜の講演までのいとまを、我々は生谷の法師ヶ谷で嘉治氏を囲んで草狩の野宴を催し、氏の温和にして高雅な風格に魅せられて敬愛の念を深くしたが、その際、氏よりかねて崇敬されている山崎閑斎の坐像を東京本郷通りの或る書店で発見しているので、それを当地の閑斎神社に神体として祀ってはいかが、との話が新潮会長の前野四郎氏に伝えられたのが動機である。

その坐像の高さは四十五センチ、巾四十七センチで閑斎と同時代の儒学者、伊藤仁斎の孫の善韶という国学者が愛蔵していたものでその背面に善韶が左の如く朱書をしている。

山崎閑斎先生像、畧伝播州宍粟郡山崎村人京師移住初妙心寺僧也縁蔵主云後土佐住谷中学爰至髮後儒成故土佐去京師住晩年神道帰

余深愛此像、　伊藤善韶取蔵

この坐像を文豪吉川英治氏が当町に寄贈されるまでの顛末は当時既に新聞紙上に報道されたので割愛してもよいが見逃された方も多いと思うので少し詳細に記して見たい。

山崎から帰京された嘉治氏は数日後、親友の吉川英治氏の文化勲章受賞を祝福すべく訪ねられた際、談たまたま山崎閑斎像の事に及んだが、吉川氏から「その坐像が書店の店頭で都塵に汚れていてはいづれどこかに流れてしまうだろう。そんな由緒のある土地の神社があるならそこに納まるのが至当だ。僭越だが自分が寄進してもよい」との申出があり、嘉治氏は我事の如く之を喜ばれ、早速前野氏にこの吉報がもたらされた。当地では予想もしなかっただけにその反響、感激は大きく、村上町長、前野新潮会長を中心に、郷土研究会、新潮会の有志がその受入体勢について或は町長室に又は前野会長宅に数回の会合を重ね、又山崎町議会議員

総会が開かれた席上、村上町長よりこの顛末を報告全員の賛成を得て挙町この木像を欣喜、拝受する事に決定し、早速その旨前野氏を通じて嘉治氏に申入れをなした。

一方周斉神社奉賛会を結成、村上町長初め十五名の発起人が奔走の結果、百名近い会員が協賛し、多額の浄財が集った。

その間、東京ではその木像は早速吉川家に引取られ吉川夫人が自ら嘉治氏宅に届けられた。嘉治家では親交のある日本画家で日展審査員の勝田哲氏、小堀杏奴女史の夫君の洋画家小堀四郎氏に見せられた処、その当時の相当の名工の傑作だとの折紙がつけられた。

さていよ〳〵周斉像は吉川英治氏の代理として嘉治氏が十一月二十二日に持参されることに決定したので町ではその拝受式と、吉川、嘉治両氏に感謝状の贈呈引続き周斉神社に於て入魂式を行う事を決定、その日を待つばかりとなった。

一方周斉神社も幟を新調し、玉砂利を敷き詰め、その前日には氏子の西鹿沢の町内会の方々が奉仕して清掃された境内は面目を一新した。然し当日は折悪しく朝から蕭々と秋雨が降りしきったが却って心の落付く静かな情趣が会場に漂った。

一時廿分頃、嘉治氏は親友で山崎町歌の作詞者の詩人富田砕花氏、のじぎく文庫編集長宮崎修二朗氏等二三士を同道来着された。

一時半役場会議室に於て衣笠竜野市長初め来賓、奉賛会員、郷土研究会、新潮会、地元町内会の方々臨席の下に贈呈式が厳かに行われた。まず嘉治氏より村上町長の手に箱に納められたまま像が手渡されたがその木箱の蓋は、明治三十七年一月に元宮内大臣渡辺千秋伯の漢語百六十文字の箱書がされており、また吉川英治氏が文化の日に左の如き箱書を見とれるほどの達筆で記されている。

奉献、畏友嘉治隆一氏稀々東都書肆ノ書塵中ヨリ是ヲ発見収拾シテ周斉先生ノ郷ヘ還サル即チ芳施ニ随縁シテ

昭和三十五年十一月文化ノ日　吉川英治誌

関西テレビ、各新聞社の撮影のフラッシュの光芒の流るる中、像は町長の手によって箱より取り出され傍の卓上に安置されたが、その風貌、端坐している構えなどいかにも名工の作にふさわしい逸品溢るゝ坐像であった。

次で町長より吉川、嘉治両氏に感謝状が贈呈され拍手が堂に満つ中、嘉治氏が挨拶に立たれたがこの坐像が納まるまでの経緯を喜びを心に深く秘めつゝ静かに淡々と語られ一同に深い感銘を与えた。引続き前野氏

の挨拶があり、小田町会議長、松井教育委員長の祝辞の後、全員山崎町歌を斉唱して式を終った。

入魂式は南斉神社で行う予定は雨の為同じ席で挙行根岸八幡神社宮司によって厳粛にとり行われ、坐像は御神体としてではなく、宝物として南斉神社に安置されることとなった。

この坐像が当町に寄進された事について一番大きな収穫、成果はその背面に伊藤善韶が朱書している「播州完粟郡山崎村人京師移住」の一文によって今までその出生地が確然としないまま京都説に傾いていたのが京都ではなく、当地であるという確証が得られそうな点ではなかろうか。いづれ郷土史家、奉賛会の方々によって何等かの方法で考証が進められ判然とする日も近いと確信している。

ペンを擱くにあたり、この由緒深い贈物をして下さった吉川先生、又そのために色々御助力を頂いた嘉治先生に謝意を表し、その御清福を祈る。（35.12.20）

弁円の父

杉山よしあき

山崎町川戸に、弁円の塔と言われる、五輪の塔がある。弁円（播磨公弁円・はりまのきみべんねん）が、親鸞聖人を、常陸の国板敷山（茨木県新治郡恋瀬村の板敷山）で呪詛し、要撃して、殺害しようとしたことは、あまりにも有名な伝説である。

だが、すこしでも、弁円の伝記を研究して行くと、左の問題につきあたる。(一)弁円の生誕地、(二)弁円の父母、(三)生誕の年時、(四)入寂の年時、(五)山崎町川戸の塔は何故建ったか。などである。それで、今回は、すこし、弁円の父についてのべてみる。

赤堀天泉編『史乗郡案内』（五十頁）には、「弁円は川戸村の産」とあり、史乗地方事務所発行『史乗』（八十一頁）には「弁円は藤原時代の終りのころ川戸村に生れ」とあり、山崎町役場総務課発行『山崎町勢要覧』に「弁円は平安時代の終り、寿永二年川戸に生れ」とあって、いずれも、山崎町川戸の産としてある。しかしながら、弁円の母基である茨木県那珂郡神崎松原の「上宮寺」の寺伝によると、

「弁円の父は、藤原良経で、弁円はその末子である。」とある。この「上宮寺」の寺伝のとおりであるとすれば、弁円は京都で生れたことになる。

ここで、弁円の父といわれる、藤原良経について調べてみると（岩間武雄著『後京極良経伝記』による）良経は、公卿で、晩年に、中御門京極に邸を造営したので「中御門摂政殿」又は「後京極摂政殿」と呼ばれた人である。

良経は、藤原兼実（かねざね）の次男で、八人の兄弟と一人の妹がある。即ち①良通（内大臣）②良経（摂政）③良尋（法性寺座主）④良円（奈良禅師）⑤良平（大政大臣）⑥良輔（八條右大臣）⑦良海（遍智院僧都）⑧良快（法然上人の弟子）⑨良恵（東大寺別当）⑩任子（後鳥羽院中宮）である。

次に、藤原良経の子は、①道家（摂政で将軍頼経の父）②教家③基家（内大臣）④良尊（三井園城寺長吏）⑥立子（順徳院后）⑦弁円？（親鸞聖人の門弟）である。

良経は、その当時の典型的な、貴紳であり、各方面の才芸を有し、中でも、歌と書には、最も盛名を馳せている。

吉野山花のふるさとあとにえて空しき枝に春風をふく

人すまぬ不破の関屋の板廂
あれにし後はたゞ秋の風

等は古来有名である。『新古今集』に、多く良経の歌が出ている。良経の日記を『殿記』又は『殿暦』と言う。

播磨公弁円は、この良経の末子であるというのであるが、その弁円が、果して、播磨の国の川戸で生れたか否か。要するに、弁円の生誕地は、京都とする説と山崎町川戸とする説と二説ある。だが、京都で生れたとして、川戸で生誕したという説を否定することも出来ない。

これを、どう解釈したらいいであろうか。私は一つのイメージをもっているのであるが、そのことについては、西播史談会発行の『播磨』四十四号を御参照下さい。

なお、弁円の兄二人、良尊、道尊が三井寺の長吏と

なっていることは興味のあることで、弁円は、この兄弟によって、三井寺に入り、修験道の奥旨を究めたのではないかと推考される。

山崎町新出土銅鐸調査略報

島田　清

昭和三五年一二月一四日、山崎町青木（字）中井（小字）小谷一。二。番地ノ二の桃面農場で銅鈴が発見された。私は、同月二三・四の両日、これを調査したので、左に概要を報告する。

まず大きさを述べると、総高三一、四センチメートル、そのうち鈕部の高さ七、八センチメートル、鐸身の高さ二三、六センチメートルで、小形に属する。また、幅は、鐸身上端で一〇、五センチメートル、鐸身下端で一七センチメートル。厚さは鐸の上端で七、一センチメートル、下端で一〇、四センチメートルである。全身美しい緑錆で包まれ、保存状態の良好な点は戦後、県下で発見された神戸市東灘、三原郡緑村出土鐸の比ではない。ただ発見後と、古い時代とに、表面をあちこち削磨していて、最初の状態が不明となっているところのあるのは惜しまれる。

鐸身表面に施された文様を見ると、いわゆる袈裟襷式のもので、表面とも四つの区画がつくられている。しかし、この部の生成があまり整っておらず、素朴であるのは、この形式の鐸としては古い部に属する事を物語っている。文様の鋳出しが浅く、且つ、埋没前に或期間使用され、削り取りも行なわれたと思われるふしがあって、当初の施紋状態が明瞭を欠くのは残念であるが、現在、認められる状態では、両面とも、ほぼ同様の袈裟襷文を持っていたことは間違いない。ただ、片面の方は、古い磨損や削り取りが甚だしく、上帯・下帯および中央縦帯の一部が認められる程度であるのに対して、他の一面は、当初の状態をよく残し、四つの区画もはっきりしている。また、この方面の左下に当る一画に手文様のあることは、この鐸の性質を考究する上の重要な手がかりで、この右方の一画にも同様の手があったことは、現在のこっているかすかな痕跡によって明らかである。ただし、古い磨損によって、この手の右半分は消えている。

なお、これら袈裟襷でかこまれた四区画の下方に、山形文帯（鋸歯文帯）がつけられ、両麓部にも同様の文様を持っている点は、他の銅鐸とあまりかわらない。また、耳が小さく素朴であるのはこの種の鐸に共通するところであり、片方だけが明瞭に見えるのは今一つの方を削り取っているためである。それから、鈕部に

鮮しい魚を
卸値で小売する
中村鮮魚店
中央商店街
電話 262. 638

施された文様が、一方を二重の山形文とし、他方を山形文と渦巻文とを重ねている点は、特に興味をそそられるところである。

従来、県下で出た銅鐸は三十数個に達するが、そのうちで、この銅鐸と似ているのは、明治年間に出土し昭和九年に重要美術品となり、同三五年六月九日に重要文化財となった三原郡西淡町慶野出土鐸であろう。大きさは、青木出土のものより少し大きいが、鐸身を同じ袈裟襷文で四つの区画に仕切り、下方二区画に手文を施したところは全く同一といってよい。恐らく年代的にはあまり違わないものではなかろうか。慶野鐸が早く重要的美術品となり、更に重要文化財となった理由は手文様のある上方に動物の絵があるためで、こうしたものは、県下出土鐸の中でも豊岡市気比出土鐸とともに最も重視されるからである。しかし、慶野鐸では、右上方の一画が古く削られていて、絵画のあとがはっきり見出されず、惜しまれているが、青木出土のものも、この部分がやはり古く削られていてもと、何かの絵画でもあったのではないかとの推測を強く抱かせる。もし、青木鐸が当初の姿を少しも損じないで出土していたら、さぞ、美事なものであったろうと思うが、何といっても、二千前の歳月を経て来てここまで残ったものであるから、あまり、ぜいたくな注文はする方が無理であろう。史乗郡の厂史に、大きな光りを加えるとともに、わが国の青銅器文化の上にも貴重な資料を提供することとなったこの銅鐸の発見を心より喜び、とりあえず、その概要を報告する次第である。

最後に、この鐸の発見をいち早く報告され、終始熱心に御援助をいただいた史乗郷土研究会の志水富次、安井寅一、同俊二の三氏、ならびにその調査・研究に種々の便宜を図って下さった山崎町の志水助役・後藤総務課長・入江産業課長・井上主事、山崎町教育委員会の岸野教育長・橋本庶務課長・福井社会教育主事・肥塚書記および谷林新・樽岡敬裕の諸氏にあつくお礼申し上げて擱筆する。

三番目の銅鐸

安井俊二

山崎町役場の産業課の机の上に置かれている銅鐸を見て実に驚いた。こんな風な銅鐸との出合いは、生涯二度とあろうとは思えないからである。全国で出土した銅鐸は、約三百と称せられている。県下では約三十本郡では三つ目の出土である。

この銅鐸は、前掲の島田先生の報告のとおり、旧菅野村青木の通称中井部落の地内で、塩田の入口である左手の山頂である。これを産業課の井上末一氏が待参されたもので、地下約十糎に頭の方を北むきにして、ヒレを縦にし、水平に埋っていたという。現在のところでは、銅鐸の真の使用目的は憶測の範囲を出ないもので、学説も統一されていないらしい。祭祀の聖具であっただろうと推定する外はない。とにかく、この近辺に青銅文化を持つ人間の家落があったことは事実と認められる。

この銅鐸の名称、年代等はいずれ専門学者によって決定されることだろうが、年代的には約二千年前（紀密には一八〇〇年乃至二〇〇〇年前）というところで弥生文化の中期頃と見るべきか。古墳文化前のことだから、一寸素人の手に負えない。現在の銅鐸分類八式の方法によると、第四式に当るらしく、目方も一六瓩という小形の方である。須賀沢から出土したのは、第五式で、宮賀からのは第七式である。模様から判断して、この銅鐸は「斜格子平帯縦横帯四区重文」と学界で名付けられているものに近い。なお、両面の模様が違っているのも一つの大きな特徴である。

この貴重な文化財の発見を機として、蛇足ではあるが、本部から出た二つの銅鐸について簡単な紹介をさして頂く。

安政二年三月に、宍粟郡山崎町須賀沢（当時葛ノ庄須賀村）の山中より銅鐸一個を掘り出し、姫路藩士山田安貞という人が所蔵していると、江戸時代の国学者平田篤胤がその著書「弘仁暦運　考」という本に書いている。その見取図によると下部はかけているから腐蝕したか、掘るとき傷めたかしたものであろう。これ

八百福商店
福井記次
山田（電四一三番）

は、松平楽翁の「集古十種」という本にも出ている。現高三尺余、口径一尺余、重量四貫八百匁というから復原したところで、身高六七糎、鉦高五七、七糎、巾二八、八糎、ヒレ巾四五糎、口径五二、四糎位だといわれている。

模様は袈裟襷文様で六分画、下部に上向きの鋸歯文様がある。鉦にも鋸歯文様が外側二重にあり、耳も四つ完残っているから相当後期のものと言われている。但し、早くより所在は不明で、滅失したものやら未だに判然としないものである。

二番目に出土したのは、明治四十一年四月三十日一宮町国貫で、福野伝四郎さんが持山の西山八合目あたりで掘り当てたとのこと。全高三二糎、身高二六糎、底巾二四、二糎という大きさで、身には斜格子目文の横帯四条、同じ縦帯三条で、文様や絵画はなかった。これは酒造家の辰馬家に所蔵されているということである。

銅鐸は、揖保郡に一つもなく、佐用郡十本郷と夢前町神種に出ているのが、本郡から一番近い。

赤穂・室津見学旅行記

山崎敬委会　福井政男

郷土研究会の旅行は度重なる毎に参加者がふえている。第一回のときは、役員が何回集って心配したことか分らないほどだった。

ちょっと第一回からをふりかえってみると、

第一回は　播磨路の史蹟と古美術めぐり
第二回は　東播名所旧蹟めぐり
第三回は　郡北見学探勝
第四回は　佐用津山方面見学
第五回は　赤穂、相生、室津見学

この第五回の旅行についての思い出を書いてみよう。

この旅行をまだ決定していないうちから是非共加えてくれと申込み殺到。余りのことに少し人員制限をしなくてはならないという実情に立ち至った有様。とうとう二台のバスを借り受けて行くこととなった。ときは昭和三十五年九月二十五日朝六時三十分頃、神姫バス前に集った会員はピンクとミドリのリボンを係から貰

って胸につけ、一号二号車に分乗。この日町職球技大会出場の選手が十人程便乗して、七時に山崎の朝もやをついて出発。この日天は曇りなれども雲東に走る。曇後晴、幸先よしとて両車とも和気あいあい喜声どよめき、早くも唄う人さえ出る有様、竜野をすぎ正条で国道二号線に出る。広く美しい坦々たる国道をバスは西に向ってすべるように走る。山陽線を走る電車にウインクを送る人もある。播磨工業地帯として躍進に躍進をつゞけるこの地方の息吹を感じつゝ相生へついた。

町職選手は相生に送られ、勝って来るぞと勇ましく目的地相生産業高校へと向った。さて車は西播一の難所高取峠へさしかかった。左は山、右は遥か下に部落を見る。自動車が出合えばたちまち立往生　スリル満足、うなる車も時を経ずして頂上に達す。頂上からは道も広くなっているし、眺望絶佳例えんに物なし。七つ八つ曲った広い道、一直線に走る赤穂線、その昔茅野三平が主君の一大事を赤穂へ早駕で早打ちした旧道、一衣水帯静かに流れる千種川の流れ、その遥か南方に開ける赤穂の町、この大偉観を一眸におさめつゝ車は曲りくねって赤穂の町に入る。左に悠々と千種河畔に牧草を食む牛の群れ、川を隔てて市営火葬場、眼前に東洋紡赤穂工場の煙突、右の畑にはこの辺特有の甘藷が茂り、やがて新装なれる赤穂駅前につく時に八時三十分であった。赤穂市民会館へ行く。県下で最も整備された結婚式場を見学。山崎にもほしいなアーと、みんなで感心。村瀬館長の説明を聞いている最中に驟雨沛然として至る。雨宿りする間に小止みになったので大石神社に車を走らせた。戦時中楽川神社から移された正門をくぐりおまいりする。新しく出来た宝物殿を拝観、そぼ降る雨をついて花岳寺に詣でた。一本一石に義士を偲び、昭和三十年五月十二日に復元された大手門番橋にカメラを向ける人も多かった。市内一巡を終えて十時三十分に出発、赤穂大橋を渡り流下式塩田を左右に眺め、国立公園御崎についたのは十一時であった。瀬戸の海を一望しつつ昼食をとり休憩した。午后一時に御崎をたって、新設のドライブウエーを走り坂越につく。千古の神秘を永久に秘めた生島を右車窓に眺め、坂越のアウトラインを望見して今朝こえた高取峠をこえて相生造船所についた。丁度二時だった。

日曜日で大体休んでいたが、特別にバスを工場内に乗り入れて見学し、丁寧に説明してもらった。世界屈指の工場松台何も彼も目を見張るものばかり、大変よい勉強になった。雨はとっくに止んで秋空から太陽は輝き海は金色に光っていた。曇後晴、朝の八卦はよくあった。今一つうれしいことができた。御崎で聞いたニュースによると室津まわりの七曲りは工事の為め通れないということであったが、私らが相生へついた寸前通れるようになったとのニュースが入った。一寸不平不満げな顔をしていた連中が一度に大声出して「ヤッターL」という。欲求を満足したところへ町職が二等をとりましたと報告しながら乗り込んだ。山と海の間を走るスリルは高取峠なんか物の数ではない。二時三十分相生を立ってこのスリルを味い乍ら室津へついたのは三時十分であった。早速室の明神加茂神社へ参詣、宮司からお宮の謂われを承った。この神社の景観又筆舌のつくすところにあらずといったところ。足を直ちに津運寺に参詣、住職よりおもしろく寺の由緒を承った。T.Y.Hであるこの寺は歴史に古く阿弥陀如来は運慶作、潮音は狩野元信の筆、法然上人ゆかりのもの多く、四光大師略縁記の中に「かり染の色のゆかりの恋にだに、あうには身をもわすれやわする」と、流石は遊女発祥の地といわれるだけあって、遊女元祖友君や普賢菩薩の化身と伝えられる室君の塔など、色気たっぷりの伝説をひめたお寺であった。お夏清十郎で姫路の物語りとなっている清十郎は室津の人で今もこの家は残っているのでみんなが覗きに行ったのです。五時すぎに室津に名残りを惜しみつつ「浪のうへにすたく千鳥と見ゆるかな」遠ざかり行く室の友ぶね」といった感じをもって、暮色に包まれかけた瀬戸の海を右に煎雑魚をいる漁村崖下に眺めつゝ御津を通り網干をすぎて一路山崎へ。六時二十八分この旅の終止符をうって別れた。この次にも是非参加したいとの声は多かった。ひょっとすると、この次は三台位のバス旅行になるかも分らない。

文久年間の議定書

一、近年諸式高直ニ雑費多分相懸リ従来之蔵敷ニテ者問屋職業六ヶ敷候間先規之通輔銭相定申度段御窺奉申上候処此度御聞届ケニ相成ハヽ付仲間一統為申合議定左之通

一、先年定之通夫々荷物ニ応蔵敷銭受取可申事

一、警数年懇意之荷主ヨリ共決ニ定ヨリ下直ニ勤申間敷右約定ニ洩候風聞ヲ有之者仲間一同ヨリ逐吟味可申事

一、取調之上不心得御座ハヽ仲間一統付合不申若仲間之

内ヨリ詫等申出候得バ其者可為同様事
荷主ヨリ輔銭直切ハ共議定之始末ヲ以断可致其上迄テ
被頼ハ心仲間ニ談事之上右様之荷主者両河岸共相断
筋立ハ迄決ニテ継荷致間敷事
一自然私欲ニ迷イ荷主ト馴合表面内実之沙別帳面被拵
等用払致ハ者風耳見当リハ心重罪処其者仲間一同ヨリ
急度船積差留可申事
右之条々猥ニ不相成様両河岸共手堅ク取極メハ上者急
度相守互ニ吟味違失無之様可仕ハ為　後日之連印議定
書仍テ如件
文久三亥癸年正月
旭屋孫次郎　印
以下十五人連印
註　中広瀬安原家の文書　当時の川舟業者の値上げ申合書である。

消息

古銭発掘　宍粟郡山崎町岸田部落で簡易水道の送水管敷設工事中に、古銭が一杯つまっている壺を掘り当てて話題をまいた。昨年十月二十日午后二時頃姫路市の河合産業の人夫が工事中に行き当ったもので、壺の高さ32㎝　直径40㎝　中には所謂一文銭が錆びついたなり約三十七貫入っていたというから相当の重さである。錆びついてくっついているのをはがして、銭を落して調査をしなければならぬので詳細は不明だが、室町期の永楽通宝から奈良朝の開元通宝まで約十数種はある見込で、この研究成果が期待される。

発見場所の町道附近は、昔から屋敷田と呼ばれていたところだというから、昔は家が附近にあったこと間違いなく、一説には、この辺一帯に七堂伽藍を誇る大きな寺が室町期まであったともいう。埋められたのは室町末期近くではないかと打診されている。

千年家・三方神社視察　大岡実博士（文部省文化財専門審議会委員）は多湖敏樹氏（神大工学部）と安富町の千年家、一宮町の三方神社本殿等を昨年十二月十九日、廿日の二日にわたって詳細に調査、重文の価値充分と保証された。この上とも地元の熱意ある援助力が望まれる。

雜論

○別記の通り九月廿五日赤穂・相生・室津方面を見学、参加人員百十名。

○十月十六日南斉神社の秋祭典を執行、地元の後援で厳粛に挙行。

○同日午後県文化係長島田清氏の「郷土研究会と郷土文化財」の講演を中央公民館で開催、会後座談会を催した。

○同日本会定例総会を開催、安井副会長より事務報告、横井幹事より会計報告あり、役員任期満了による改選を為し、左の通り新役員を決定した。

会長　村上　彰治　　幹事　庄　和夫
副会長　岸野市五郎　　〃　藤村　省三
〃　安井　寅一　　〃　宇野　正瑛
幹事　志水　富次　　〃　福井　政男
〃　横井　恕一　　〃　岸本　正一
〃　和田　秀夫　　〃　志水新次郎
〃　入江　静夫　　〃　福井　記治
〃　三木金之助　　〃　池田　平市

○吉川英治氏より本町へ南斉木像が寄贈されたのを機として、本会及び新潮会の有志発起して、山崎南斉神社奉賛会を組織、基金造成と像の奉祀、社地社殿の整備等を積極的に推進する予定で、近くその具体案が作られるものと期待される。

会員名簿（9）

上寺	福井　貞夫	東鹿沢	平瀬　久子
今宿	戸敷　とよ	西鹿沢	福田　留治
〃	平瀬　しず	姫路市	横井　淑子
〃	大前すみ子	神崎郡	長沢由紀子
〃	藤原　清子	神河中	山本　校長
〃	福井　すが	〃	雲田　先生
〃	中谷　もと	五十波	橋本　清
〃	松田さかえ	菅野	谷畑予賀慧
〃	栗下春次郎	〃	武田　郁子
〃	井口　よね	〃	庄　町子
〃	井口　小春	〃	長田ひさえ
中宏瀬	松下鉄太郎	〃	長田よし子
東鹿沢	島村　鈴子	〃	長田　信子
〃	冨和　和子	〃	尾鼻　君子
〃	阿曽　実	土万	小林　宇市
〃	植田さと子	千種	船越　正己

嫁入道具・乳母車
トランク・和洋家具
久保タンス店
本町局前
TEL. 7